Ⅳ．中世の食

中世（平安時代の終わりごろ～戦国時代）の食については、近世、江戸時代に比べれば文献もさほど多くはなく、遺跡の調査例も少ないため、わからないことが多いのが実態です。しかし近年、食の一端をうかがうことができる遺跡の調査が行われましたので、紹介してみましょう。

中世前期（平安時代終わりごろ～鎌倉時代）の湊町　松江市の南郊は、古代には出雲国府がおかれ、政治・行政・文化の中心地でした。ところが中世になると、中央集権的な古代の律令体制が崩れ、権力が分散化する中、府中という緩やかで広範囲な中心地に変化します。国家や地方行政の支配体制が緩み、商業や交易が活発になるのも大きな特徴です。とくに、海や内水面を通じた交流が盛んになり、船で運ばれてきた物資が集まり、人が集まる湊町ができます。

近年に調査された竹矢町浜分Ⅱ遺跡は、当時の地形を考えると、中世の有力な寺社がある地域の、中海に突き出した浜の先端付近に当たります。小規模な二回の調査で13世紀ころ（鎌倉時代）の中国磁器や京都産食器用皿、木で作った折敷（おしき）や箸、曲物などが出てきています。それと一緒にアカニシ、ハマグリ、サルボウなどの貝類やタイの骨、水鳥の骨などが出てきました。湊は船に乗ってきた多くの人でにぎわっていたと考えられ、食事を提供する店などもあったものと考えられます。海岸べりということもあって、中海の砂浜や岩礁で獲れる大型の貝やタイ、肉などが食されていたことがうかがえます。いずれもこの地域で今でも食べられるものです。詳しい調査が進めば、中世前期の府中や守護所の様子が明らかになることが期待されます。

八幡町浜分Ⅱ遺跡から出た貝とタイの椎骨
（アカニシ、ハマグリ）

古代の復元地形に遺跡の位置を表した地図

中世後期（南北朝時代～戦国時代）　大橋川が最も狭くなるあたりの朝酌町若宮谷遺跡では、14世紀後半～15世紀前半の貝塚が見つかりました。当時の人々が食べたものを谷に捨てた跡で、貝殻がアルカリ性のため魚や獣の骨も一緒に出ています。貝類で最も多いのはヤマトシジミでサルボウ（赤貝）が続き、汽水域の貝が良く食べられていたことがわかります。ほかにサザエ、アカニシ、アワビなどの海産の貝類、カワニナやヒメタニシなどの淡水生の貝も見つかりました。引き続き、多様な水産物を食べていたことがわかります。